

忠義之部
 張夫
 歐敬
 麥國俊等九人
 孔四郎
 瓊枝曼仙
 義牛
 義馬
 秦氏大
 義天
 毘陵猴
 義鶴
 龜

3144
 2





通俗排悶録卷之二

忠義之部

目錄

張夫子
張 襲
石士鳳
蕭効用
費宮人
瓊枝曼仙
義 牛

閻典史
歐敬竹
凌國俊等九人
孔四郎
呂 厄
義象塚
義 馬



此部之人物
皆忠義之士
其行誼
足以
垂範
後世
其
名
亦
足以
流芳
百世
矣

3144
2

忠義之部

秦氏犬

毘陵猴

龜

合十九種

義犬

義鶴

通俗排悶録卷之二

忠義之部

張夫子

木樹園翁 譯

全亭正直 校

明えの崇禎そうてん年ねんの初はつ永平えいへい地ちの兵備道へいびどう
西名地より孝廉こうれん
 張春ちやうしゆんと云いふ者ものありて、
 屈まが股またせど、衆しゆ之のと殺ころさんと欲ほむ。上かみ許ゆるし玉たまつと、關せき廷てい禁かぎ裏りに、
 忠ちゆう義ぎを高たかし。と賞あづかり、
 玉たまふ張春ちやうしゆんも亦また辭ことせど、教しゆふ道義どうぎを以もつて、皆みな敬うやまつぐ之の事こと稱なづふ
 張夫子ちやうふしと云いふ坐まする必かならず南みなみの向むかひ
明の都仁終つひに清人せいじんの如ごとく薙髮ちやくぱつせしむ

非明録卷之二

曲く之の後に臣下の若く曰。真の忠義の人あるは汝等之の学ふべし。
張春卒する不及と上深く歎息し王入於下の学者紙錢を以て奠
と曰。敢て清徳を汚さざると。天下定まると。後世祖章皇帝燕都
へせむの侍臣の若く曰。卿等昔日張夫子あるのみ我知ると。南国
のみ唯此一人あり。然るを之を穢者たるを如何のぞやとの王ひく。

閻典史

閻典史 閻氏典史の一名の應元字を嚴亨と云ふ。其先ハ浙の紹興の
人あり。四世の祖某と云者錦衣校尉。禁中を守るとある。始北直隸の通州の
名人も。應元椽史。下役と名を起す。京倉大使とある。崇禎十四年江
陰の典史とあり。始と到ると時海賊あり。船百艘をり。小憻と云く。

の乘じて至す。乱と内地の入り。其勢猛し。城の近づく。縣令ハ此
時旁邑に近村の往々跡あり。丞も主簿も恐は怖き。男女唯此
ちもをり。時の應元刀韃を帶馬を躍ら。大市を呼と曰。好
男子と云ん者ハ我に従て賊を殺し。家室を全くと呼と云。此声
を聞て後ひ集る者凡十計あり。此も械のちを苦む。應元又馳
て竹ある處に至ると。曰。事急なり。人ども一竿を假せ。直ハ我より取
ると云ふ。千人の者江岬の川岸に並び。舟を林の如く立てり。應元
かゝること。矢廻すと。矢を發し。一夫を放て。賊一人を射殺す。ほげく
賊三人を殺し。賊恐して。船の登り。帆を揚て去り。巡撫官は
應元が功を奏す。勅し。都司に仰有と。應元を江陰の尉に仕。徴

巡とく回とく賊を捕る夏を主とらむ是れは黄蓋を張と毒縣
 と立と。前驅道を清つ行事格外の免さす一戎邑人采ちりさせと。
 父くしと勤功を以と廣東の英德縣の主簿とある。陳明選と云者應
 元の代と江陰地名の尉目と成まり。應元母の病の依とつと行也亦国の
 變の會めまへ。家中の者を引つと邑東の砂山地名に居る。此歳乙酉の五月
 あり。此時清朝の天下を得と。改元しと順治号といふ二年のあり。豫
 王親王の大軍江を渡り金陵地名を降と君臣がと走る。宏光帝明尋と
 執へらと王入清朝清をも貝勒清の及它將を遣し。東南の郡縣成
 取る國々の使或の降や或の走る。又門を閉と距む者あり。之を攻と六
 枝速ちるの時を以と計と。遲も十日を過ぎ。京口の境よを以南南の

月の間の名城大縣を下まると百を以と數入と江陰の地を彈丸
 の如き下邑とせ。堅く守が故八十餘日ありとやうくと下りて
 元が謀めとま。初め雜髮をもむの令下とる時。諸生の許用徳と云者
 閏六月朔日明の太祖の御容を湖倫堂孔子に掛け。衆を率と拜し
 且哭と士民集る者萬人むり。此時新の尉ありとる陳明選を推
 をと城を守ると。城主らとんと。明選が曰吾智勇閭君の及むと。
 うか大夏ゆの閭君を用べと。夜騎兵を弛せと。應元を迎と。應元
 家丁四十人を率と夜馳と城入る。此時城中の兵千の満と。家數
 僅一萬ぼつと。又糧を吐と所が。應元至と。人數を算と見。樓櫓
 と音清し。民の戸と。一男子を出しと。城屏の棄せと。餘丁ゆと

餐を運つ。又前の兵備道前の曾化龍曾化龍が製せる火薬火器を城
 樓に貯ふ。又富める者の勸と財を出さむ令と曰必金の是非を
 標藏帛布帛布を它物に至るまで出まべと程辨と云者首二
 萬五千金を出せ引續くと云者ヨクありと。城中に集まるの火
 薬三百器。鉛丸鐵子千石。大礮百。鳥機千張。錢千萬。緡粟麥豆万
 石。其外酒醋。鹽鉄。芻藁等此此準準也。斯くと分くと城を守る。黃
 略との者東門と守。把總某南門と守。陳明選西門と守。應
 元元づうら北門と守。仍四門を檢巡。部署始と定。時
 城下を責る十萬の清軍。城の四面十重を圍。矢を射る事
 烈。城上疾を蒙る者少。城内も礮礮機弩を射出。

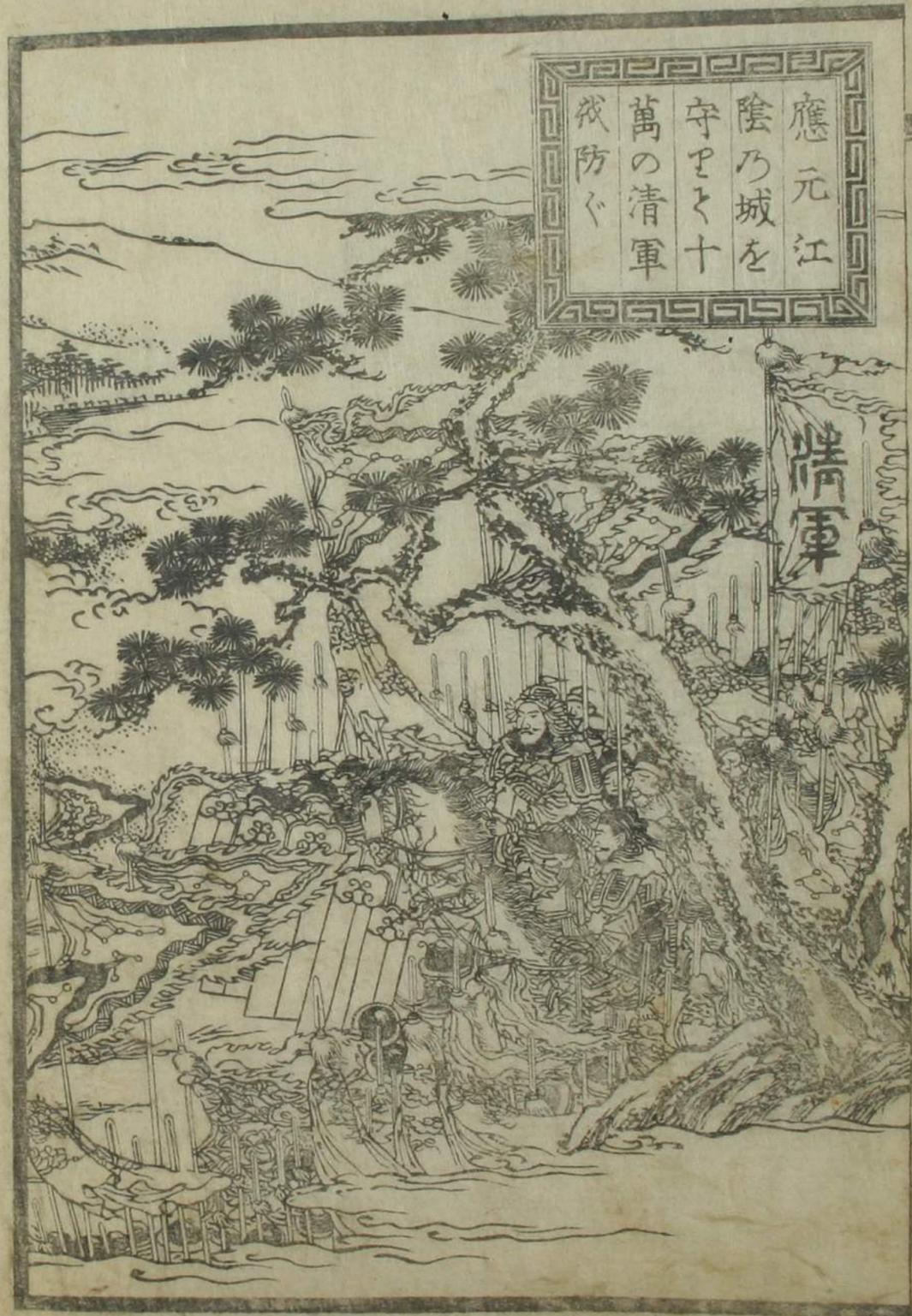
つま。清軍是のありと死せる者ヨク。其と大礮を射。七城を撃
 つ。應元鉄葉鉄葉を以て門を畏。鐵の紐を貫。是は護。又
 空棺の土を盛。積。所を塞。敵又北城を攻。北城小。穴明。き。バ
 人入。大石。一を運。壘を築。く。一夜。成。城中。矢少
 き。故。應元計をめぐ。黑夜。藁を束。人形を為。燈を
 の。城。中。の。兵。士。垣。内。伏。鼓を打。叫。其。体。繩。下。城
 を。敵。の。營。を。襲。え。と。清軍。大。驚。馬。矢。を。射。る
 の。兩。の。如。夜。明。と。矢。を。放。る。等。又。壯。士。を。遣。夜。敵
 の。營。入。須。風。火。を。縱。清軍。大。亂。相。殺。死。者。数。千。清軍
 城。を。卻。離。る。二。里。營。を。作。清軍。責。む。大。帥。

抄録録卷之三

五

の劉良佐と云者。騎馬の兵を従へ城下小至り呼と曰。吾爾君と相
 識ちる也。我為小閻君の言へ相見えんと欲すと。應元城上小立と共
 小語る。此劉良佐ハ宏光帝四鎮四所の要の一人小一と。廣昌伯廣昌地名 伯其封の守
 小封せらる。然小清小降と今兵を総る者あり。時小應元小語て曰く。
 宏光帝も走走江南明の都今主なり。君早ハ降と富貴を保保
 べ。應元曰。某明朝の典史小役のそ然と大義を知り。將軍ハ國
 の重鎮重役小一と。江淮地を保り夏あつた敵の為小前驅と抑何の面
 目わりと吾邑の義を知る。士民を見んとする也。良佐此言を笑と
 慙と退く。應元體大きく面蒼黒小一と微髭あり。性嚴毅物とまじ
 小一と號令明肅擬を明小守りまるととる也。法を犯さ者あはべきびく仕

置くと少許許さざり。とこも財を輕んとく賞賜を懐む夏あり。傷
 つり者ハもつと割口を畏れ。戰死せる者ハ棺を厚くと之を葬
 せ。祭ヤと為小哭と。壯士と語る時ハ必好弟兄と稱くと名を呼び
 けり。陳明選ハ寛厚柔和あり人小一と。城を巡る毎小其士卒を慈み
 勞と事小依且小流を流を故小兩人共小士卒の心をゆる。皆此人の
 小死せんと男む。是と先貝勒軍と統地を取らんと。蘇松と云者
 去きり小郡を破り。師を率と此城を攻り小將とあり。者兩人生捕と
 降ヤとあり。城下小つと來り。跪と。兩將先泪を流と。應元
 城上と罵と曰。敗軍の將禽と成り。速小死せ。何の為小位と
 呼る。清軍と又人を遣り。諭と曰。四門を守り長ある者各一人



應元江
陰乃城を
守る十
萬の清軍
戎防ぐ

を斬らば即圍を解べしと云。應元声を厲しく曰。寧ろ吾頭を斬る共
 何ぞ百姓を殺さんと之を吐つて去らむ。中秋の時ふちりけし軍民
 小月を賞むる錢を與へ其人を分ちて引つて城に登らしめ酒を飲
 し。樂を制し五更の比善謳入者唱へて。斯するも三夜あり。貝
 勒想入此城内降る意ありと云。攻る事愈急し。戰聲晝
 夜絶む。百里の地是が為小震動せり。城中死せる兵日を積くヨリ。
 哭聲聞えく止夏あり。應元義心を勵し。槽に登り米配す。意
 氣自若し平氣。こゝと常小變らば一日朝より大兩降り日中の比紅
 の光一縷。土橋より起り直小城西を射る。時小城俄小陥し。是清の
 軍より大石火矢を放てる。清軍烟霧兩を分ち群りて城に登る

應元必死の士百人を率て突くと回して戰夏八日。或殺さる或傷つく
 者十を以て數入。再門小至し門閉て出る者少む。應元免れど
 と度。前ある湖水小身を投る。水項を没せど。劉良佐軍中
 令し。必應元を殺さるしと捕登しと云。遂小縛せし。良佐乾明
 佛殿小足を延し。居る所。應元が至まるをこんて躍り起り前
 至りて。哭き。應元咲て曰。何を哭する。事まで此小至る一死
 耳と。さう貝勒小見え。立て坐せど。一卒鎗め。應元が脛を貫く
 脛地小踏びぬ。日暮と應元を栖霞禪院寺院のの内小繫く。僧夜聞
 小應元大の呼り。速小我を殺せと云。終夜を殺せくと呼る。僧
 小寂と。吉あり。性くん。既小死し。有き。應元城を守り

清軍の攻る。ふせだ守る。八十一日。清軍城を圍者。二十四萬人中
と死せる者六萬七千人。巷の戦く死せる者又七千。傷つる者七萬
五千餘人。城中死せる者五六萬。尸巷の満。然共一人も降る者無
り。城破る時。陳明選うちづら成と大の戦く。兵備道に至
と身重創を負。刀を握。壁上の倚。仆とす。七
死せりと。又或ハ門を閉。火を投。死せりと。云傳へる。

張聚

張聚ハ廣東布政陳選が吏。明の成化年中。中官の章春と云
者。廣州を守。恐ハ民を虐。時ハ番人の賈をた。者ハ力麻
と云者。船を海上ハ泊。換門答刺國の貢の使と詐。貨物を

賣らんと。章春利を欲。故ハ之を許。陳選其詐を
知。之を逐。遣る。章春又越人王凱父子を海上ハ遣。私ハ番
人の貨を買。知縣。高瑤と云人。王凱を執。其贓を發。き
見る。巨萬あり。陳選都ハ之を訴。時ハ巡撫都御史。宋旻を
下。問ハ。宋旻章春を畏。詰。陳選書を呈。と
高瑤を擡。章春。陳選を恨。陳選と高瑤と官物を
貪。と告。帝大ハ怒。刑部。負外郎。李行。并ハ
巡按御史。徐同愛。仰。之を鞠。行と同愛と皆章春
ハ阿。計。陳選。黜。張聚ハ賄。陳選ハ罪を負。せん。を
頼。聚。李行。其時。張聚を囚。呵責。張聚ハ白。死。さんと

ちんぐ早く死せし。私の憾を以て公義を滅し。正入を害せんやと云く
 従へど。李行終の陳選が罪をあげて曰。勅を矯く其属吏の官庫の
 粟を遺まると云を以て奏す。陳選思ふごとく徒罪徒罪ハ怪き罪也。流し者
 となりて公役の人足らざる也。
 の料を蒙り。南昌地名。南至く死する。友人張元禎此を葬する。張娶京
 内少く。綱至す。上書して云く。臣聞て周公の元聖なるも。四圍の傍
 何れも疑を致さるの君を免まじ。成王四圍より中觸せし流言をばく。曾参
 大賢の如く。至の言柄を投するのを母を免まじ。和名抄。柄機之。曾子の母
 を殺せりと云度。曾参其子を疑ひ。夏元。是皆口は能金を鏢し。毀る骨を銷まじ。物ある故
 あり。陛下の明るる夏日月の同く。恩は父母の齊し。何ぞ枯日の中尚
 屈小羅で。覆盆盆の下復冤小沈むるあるや。竊の考るる廣東の布政使

重役の陳選少く。寔學を崇も。夙の孤忠を抱く。群邪の間處り
 官名。陳選少く。寔學を崇も。夙の孤忠を抱く。群邪の間處り
 衆争の地小立てる。内官章春番人の通せるる。発也。知縣高瑤こも。我
 察も。陳選書りて之を獎む。不直を正す。監司の職あり。宋旻徐同
 愛勢を怙奸を保。諸をく其意を恣小せしむ。陳選を誣く。貪まり
 くと聖聰を焚も。李行命を受く。訊と雖。章春が頭指を得く。夏と
 曲く陳選を罪人とす。臣のと下るる小吏あり。誤あるを以て法小觸して
 黜らる。寔の臣が罪あるも。章春臣が憾公あると云く。臣の厚く賄
 くと陳選を罪小陷さんとす。臣小吏ありと云。其昧心を以て是非をわさ
 む。章春乃李行を以て。臣を罪人と云く。鞭うらるる数日。身中小元吉。唐
 あり。李行章春が言を承引く。陳選詔を矯く。粟を其属小與へ

其報を得んとまこと云入是の共妻を毀く夏姫と。共妻の夏女 伯夷
 賢人を首陽を誂く盗跖 盗人盗跖が ともなるを 近年嶺外の地大水ありと
 山の飢死 民食する物を乏しむるも 泉藩之を安ざるが如くも 陳選獨よる夏憂
 上命の下らんを待時ハ民の命絶ぬ仍と賑り救ふる民の命を救はん
 が為る。他ある非ぞ。陳選性のと剛めしと罪無しと奸人の虐を受
 慣徳の任む。旬日めしと殂ぬ。李行速の死せんる亦幸ひ。病中藥を與へ
 む其養子を韋春がめしと遣く。陳選が卒せる亦告と喜びぬ。小人の
 佞毒ある。此の如きを致せり。陳選行を潔しと諛の罹る。君の遙めしと
 誰其冤を訴へん。臣罪を以て介らんと書く奉る。死を冒しと申す。身の
 昂み者火らるる惜む。忠廉の士を痛む。外に屈冤を負士ありと。内

の諛佞のむびるを居る。聖明の累とんと書く奉る。死を冒しと申す。身の
 昂み者火らるる惜む。忠廉の士を痛む。外に屈冤を負士ありと。内

歐敬竹

歐敬竹ハ武進市 市の人の人多く古短くしと大言を好めり。生産無しと
 城南の戈橋の居る人の為る小破とて扇を脩とて業とて。百錢を得る
 獨市におく飲む大の醉ハ古を巻とて歌ハ市中の人皆之を笑ハ甲申
 二月天子の愛ありと 明のころ 隣人を招き共小曰遠く去りて女と
 別とんは我一杯の酒を盡せ其妻壺を提と来り。敬竹を見と笑て曰
 斯言更を休よ。今舊官皆新官と作と聞る。此時明の代はく。やうと
 我ら如き者何せん。敬竹曰。姫何ぞ知らん。其丁そ此翁が死に死故る

是と云く。竟小戸を圍く自經く死すけを。

石士鳳

石士鳳も武進市の人なり。家貧く妻子あり。略字を識ます。一僕也。此僕も亦妻子あり。歐敬竹死し。後数日あり。士鳳脯を買と。其先祖を祭す。拜し。且哭し。哭し。鄰人を邀へ。與酒を飲る。昼夜あり。潛小家を出。忠義祠の池中小身を投て死す。忠義祠ハ故宋信國。文未祥及。姚言。陳焯。王安節以下の十三人を祀り。とある所也。姚陳の諸公ハ皆宋の末小城州を守り。士鳳城陷す。死す。其夏ハ宋史并小郡邑小をえり。さく。士鳳が死せる人の知る者あり。曉ぬ及び。其僕も。市小哭し。曰。我主人死せるを尸を見

ぬ得むと。遂小池の旁小雙の履あり。尸を得る。是より前士鳳の死せる時。さく。紙を剪り。位牌とす。明布衣石士鳳之位と書く。忠義祠あり。十三人の下小置き。又其隣棺を賣者小之金を與て。曰。世亂と。吾此金を用る所あり。姑汝小寄るありと云る所。後小士鳳死し。棺を賣る者来り。葬送の用意を為す。其僕も終身妻を取らざりけを。

交國俊等九人

崇禎癸未の年。賊武昌地を破る。岳州名を襲ひ。遂小長少地小討入ぬ。司理官名日本。蔡道憲力盡く危坐し。待小賊刃を断らんとす。怒罵く。賊其足を断る。以て揮ふ。又

身を断る。遂につらつらに断殺さる。天子命わたり太僕寺少卿の
官を贈り。忠烈と謚し王に。初道憲が身をまかりぬはつらつ。凌園
等。国俊を九人の者。道憲に従う去らむ。賊此者共を。道憲の降る
事を効めむ。國俊曰。我公節を屈せむ人なる。吾等とてよむ。去と
今日を俟と云ふ。賊刃を以て之を脅せむ。復咲と曰。吾等死を畏
はてしと云ふ。去と今日を俟と。賊あせむ。之を殺む。内四人が曰。願くは
我主の骸を葬り。後死不就。賊義とて之を許す。時四入衣を
解と道憲が屍を裹と。之を南郭地名南の郭外に葬り。自刎と死む。國俊
が婦年少し。其子文志を撫と。節を守り居り。常々文志に向て父
の國の難死せざる。文志が語る。文志執政の人のゆゑ。行くと歎き訴ふ。杖困

俊を以て忠烈公の祠堂に附して配する。是をと云え。

蕭効用

蕭効用の漢上の蕭亮宋が僕たり。宋孫景と云者。田地を買と。
景三の佃をとり。一歳とふ其租を納む。一日効用主人の命を受と。
租五十金を集め。家へ歸ると。一里許を行く。景三衆と計路
あり。之を奪へり。効用官へ至り。之を訟へ。官急め之を捕
へんと。景三窘らむ。又衆を集め。効用が夜宿せる處を伺ひ。炬を
列ね。四方を圍む。棒を下さる。兩の如し。旁の一人の兇者。老嫗と。刀
を断と。蕭亮宋人を殺せりと大呼り。此の亮宋が露知らざる
る。竟に囚らむ。獄へ入り。死刑小行つ。是と。効用物狂ひの

如くありて。日夜走りありけども為んずる。るを解せる者不遇と
 いふ。其好らんこと云の事を解せる者給と曰。汝主人の代と死すま
 人の命生べ。効用使と大の喜び。冤の陥りし由を文ぬある。又密
 小鍛冶を頼まて一尺むりの刀を打せと之を佩びさく遍く一族の者
 小辞し。主人の婦の前小跪さく。とてかみせ自愛し玉へと云と。一語も
 已ら妻子の上ぬ及むと。とて行きく。時小按察御史 目付 應公と
 云る人獄を獄し玉日中。主人の蕭亮案も遂首ぬ。囚人の中は
 在りて生ける人の如くある。効用其側より此を伺い。がらぬ忍び。怒
 左のゆに冤状を持と。右の手小利刀を出し大ぬ呼ぶ。曰。天なる半孫氏
 の老嫗を殺せ。者ハ堯案ハ非也。斯ハ蕭亮効用ありと云と。自刎。血

わどもやうく御史の懸擗を赤くし。應公の緋衣ぬ憐む。應公
 大息し。其状を署し。命し。人ぬ負はせ。とてさく。目と目を所
 と正氣無けども。口言くと欲するが如き。三日幾く。二両と
 較み。少く正氣つと。曰。吾死し。主人生るるを得。且ハ徒死ありと
 云。守る者告と曰。汝が主人已ぬ生ぬ憾あるべしと云。効用遂に死
 を奉。三十八ある。時小按臺よ。諸の監司ぬ及ま。憐む。其の費
 を玉りぬ。景云。捕りて獄ぬ入。堯案ハ免と。家ぬ帰る。

孔四郎

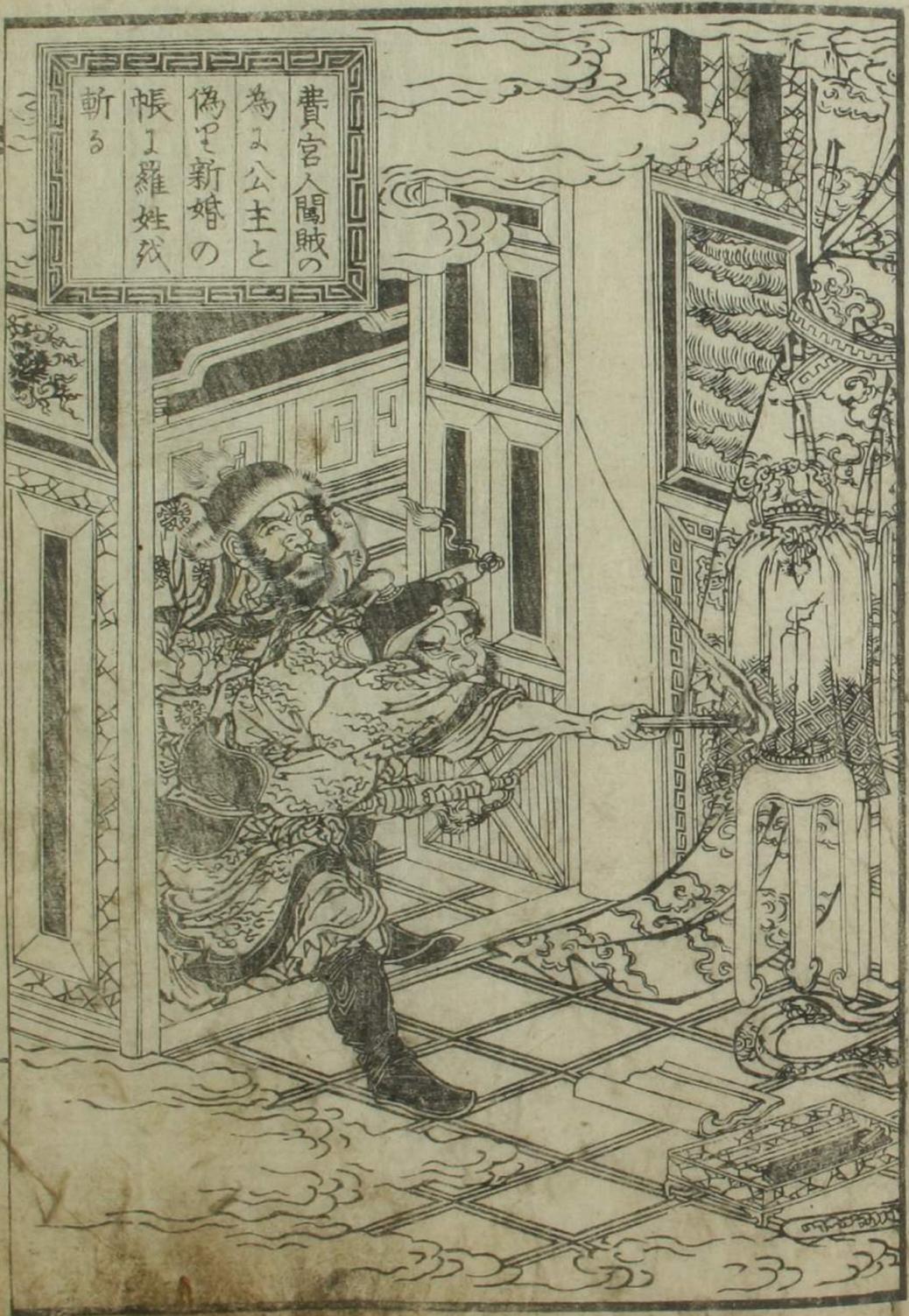
勲衛の地 嘗守経の鳳陽の人名 の人あり。優人孔四郎と云者。と愛し。か
 ら。孔四郎ハ紹興の人名。のへり。文の通。誼を尚。嘗が恩情ぬ感

いづく遂の身を寄と之の事ハ嘗常の縉紳の家ハ出入とるハ必
孔四郎を伴ハ行ク。嘗武職とるも家大の富め也。聞賊李自成ハ
とと聴と嘗四郎と謀と蓄とる金と他所の瘞と賊將宮撫民と云
者之を知と嘗と博と拷問と次ハ四郎を執えと責め問ハ四郎己
と得と金を瘞とる所を云。嘗ハ囚とありと入くと共ハ害とせとぬ。撫
民四郎が姣と又文ある以と麾下の留めと愛と翌日撫民の
醉と四郎の歌ハ一とと樂む。夜ハ入と撫民が睡とるハ同ハ孔四郎潛
ハ刀を伎と刺殺えととるる心せるとと撫民が股を刺と撫民覺と
声とあけと呼と四郎をせんら道るべうと知と刀を提と罵と曰
我嘗守經と骨肉の親とるも勝と。生死と同とせんら我誓と。奴其

財を奪ハ又其命を隕せ也。我今守經ガ為ハ仇と報せんとして事
とる。死と鬼とまりと賊と殺と。守經ガ為ハ仇と報せんとして罵と
遂ハ殺とせとる也。

費宮人

費宮人々年十六也。何とこの處の人とるるハ知らざ。容も意を
勝ととめとてとぞとる。明の懷宗帝右の計と。御女の長公主
帝の御女を公主の侍女とと。王ハ公主憐とる。深とる宮人帝の
賊ガ困を乱とる。夏王ふをえと。女心ゆり竊めとる。心とる。侍
王承恩ハ向くと殺のありと。承恩曰。汝深宮ハ居と。此を知
と何とせん。宮人曰。深宮ハ居と。故ハ知らんら。承恩ハ顔とす。



覚悟せん為まりと云ふ承恩意の之を奇とす。斯く哀の深く熾ぬ
 ちや帝の憂の深く深けとて宮人承恩を問責するもの愈々けり。
 承恩曰汝のえぞ他人の問はざらん。数我の死を問ふや。宮人曰朝臣
 皆怠りて一人も君と困る意ふ者あり。吾公が忠誠あるは知まり。
 故に相問の事と承恩益奇とて曰。汝預計んと云其計支のえ宮人
 曰の不幸をらば惟死せん。然も徒に死まべからば承恩曰古人の
 詞を生る者よく死するめ。死せる者よく復生をめん。生る者其
 言を食おんを信と増す。汝之を能せんや。宮人曰其時お至らば公
 こそへ。茲に又魏宮人と云者あり。年費するを長はく是も貌美
 あり。素より費と相善。費が言を聞くと曰。汝が計甚成難し。五口を

難とちとる能はず。其時の臨む死しと志を伸べんものと云承恩
 之をも奇とす。甲申三月十九日。閹賊李自成都城を破る。王承恩
 走と帝の報む。帝后と泣く御いもおひ有り。宮中の人ありて居
 と泣ざるあり。后自縊とて失せ玉ふ。寵愛の表貴妃も同く縊と
 ぬ帝剣を抜と妃数人をひ掛玉ひ。公主を呼くの事あり。兩年十五
 何ぞ不幸ありと我家の生とてやとの玉のく。左の袖の御泪を掩ひ右
 のひの刃をふる。公主の左の臂を斬玉ふ。公死しと云ふ。帝
 御手慄と殺し玉ふ忍びと。承恩と共に南宮お至り。萬歳山の
 壽皇亭お登りて御まづ縊と玉ふ承恩もつと縊とて生を
 けり。時の尚衣監尚衣の帝の御衣の類裁縫つるを掌る役 何新と云者。趨と宮

入と帝と見と見と見えさせぬむ。たゞ公主の地の地は侍とさせ玉ひ他
 の宮人悉く道とまよと。貴宮人の側小哭し居るも相共不救ひ奉と
 をかうなく。魁せ玉ひと公主のさあへく。父帝我の死を玉ひ我何ぞ敢
 と生を偷せん。其と賊至ら宮中を索めと我を捕ふべし。いんぞ道
 るるのを得ん。宮人曰願くは公主の御衣を婢に賜ふべし。婢賊を誑と
 公主を脱せめん。落行を玉ひ何方が好らんと云ふ。何新が云園丈
 の弟可るべしと云く。公主の衣を宮人の與へ位と別と玉ひ何新の
 目とく。公主を背の負とまよと出ぬ。叔李自成へ承天門を破りて
 宮中の乱入らんとさる。魏宮人大叫呼と曰賊大内へ入ると我輩必と
 辱と受らん。志ある者へ早く計るを為ると云く。身を躍りて御河

の流と沈む。此の従ひと死す者三百人むる。水紅粉の深ありと
 河水あまが流とど。芳き香数日絶ざりけり。費宮人入らんと
 死せる死を送す。我衣腹を脱と公主の腹を着し。智井の中を匿と
 居る傍を賊引出しと李自成の見えし。宮人曰我の長公主と女
 無禮とさるとと云。自成の中其美ある。喜び此を納とん。の意
 あや。自成又天子の御座の陞らんとする。時忽目眩き神消るが如く
 しく白衣の人長数丈あるが。前め立ちと帝も亦傍に在すと見えと心
 小大ぬおとを恐る。此の依と長公主を以其愛將る。羅姓の與へ此
 へ圍賊が下めと殊の軍功あり者あり。其勲功の賞ゆとと與へ羅姓
 ぶるの甚。宮人曰圍が言吾背くと。然ととも我を帝の子とる。汝祭を

設く先帝を祭り且難の従へる大監王承恩を其側小祔一祭を
 勤の禮を盡さば我汝の従え。羅更の喜と清の儘の従ふ宮人位
 と先帝を拜し又承恩を拜しと曰。王公王公爾能死しと復生れ
 りと吾言を聞えや。吾前の言を踐ちんと云と泣ぬ。諸賊大の樂成
 張と羅が新智を賀す。羅は飲と大の醉と内へ入る。宮人又
 酒を具と新婚の盃を初む。羅大飲め引つけ飲と吾子を得る
 之。鳳王の惠の厚が致す所あり。一通の文を上りて謝を述んと
 書をあらへ入ると云。宮人曰。是ハ難きる。非ぞ。我より此を
 むぐ。間君ハまづ寝王へ書し了らば君を起しとせせしめとせん。羅愈
 喜ぐ。臥仆しと。勲の声雷の如し。宮人侍女を屏け。獨燈を挑げ

坐む。叔内外共寂と。静しぬ。羅が喉と。刺を羅躍り起しと。戸を排き入と。故と。羅を息絶と。傍の華燭を明らう
 ち。宮人を見ま。正しく坐しと。物い。審の是を視ま。我と頂を
 到と。悠然と。疾自成。告け。自成。駭き。歎と。禮を
 此を基。公主の死。王。復。公主を索む。をせむ。

呂尼

明の正統八年。英宗皇帝親師を帥と。北虜の酋と。先を征し
 玉ふ御駕を出。房時。陝西の地。呂尼馬を叩と。辣と。死し。果

此戦利ありて帝北虜の囚と成玉了。其後英宗重祿一玉の煩天
府の保明寺を建立し尼の肉身を寺中の祀玉入俗の此寺を皇王姑
寺と稱せり。雅望曰據資治通鑑三篇及皇明通紀等英宗征也先在正統十四
年今云八年者疑誤

瓊枝曼仙

明の末の張献忠と云者。荆州各を破り惠府惠王の樂戸數十人を
召し酒宴をさす。妓の中瓊枝と云者色藝ありて。瓊枝曰我身賤といはれ何ぞ歌ひて賊
瓊枝の命とて歌ひゆんやと云と。後ほど賊怒とて刀を抜く瓊枝を快む瓊枝
の觴をさすめんやと云と。後ほど賊怒とて刀を抜く瓊枝を快む瓊枝
曰汝が為さる此の止まらざるは。我死を畏れず我をいふと為んと
云献忠ゆくと怒り瓊枝が身をすくぬ。此の事とて犬の食せり。又

同時の曼仙と言者あり。献忠召し試むる此をいふと盡し
歌ひ勤く意の叶はるふまけるが故に献忠大に悦び寵愛せし事
比ふ。献忠毎夜寝んとする前必大に酒を飲む。曼仙傍に在り。曼
仙の毒を酒に入しとて盛とて献忠に飲し。献忠酒の毒
ありて知らぬ。眠睦するあり。曼仙が顔の赤をみり。引よせて女
先飲よと言。曼仙否とんと。曼仙が顔の赤をみり。引よせて女
斃とぬ。献忠始とて覚す。其尸を磔せり。とて。献忠が勢ひ猛らば
土を守る諸臣の皆逃げ走り。或を降す。臣とあるものも。死せり。
瓊枝の娼妓の身を顧む。死せり。忠臣義士のあり。所
劣らざる。曼仙が毒の計の事成りも成らざる。死を免れず。と覚悟

一房のりや。若成るや國の為小賊を殺すの功大なるを先飲之
斃するや。其俠烈の氣千載の人々を憤し且歎せしを
ゆらんや

義象塚

馬隆川のうら小義象の塚あり。明の天啟年（西地）の間水西各の安氏殺さる
衆を率て州を犯す。眞省（眞の各首ハ）ぬせだの備をせ。撫軍（撫軍）日射
陶土司（陶氏の）庄屋小調と禦ぐむ陶の家小一の象を畜す。日の暮る此山洞
の中の伏しと自異ゆ。泥水数斛を吸ふ。大の哮跳と直ち小賊壘に至
り。鼻より泥水を噴き賊小あせり。賊駭るる。自異ゆ。賊を卷空
小擲と墜し死す。陶が股肱と頼める勇士機小乗し。北の成逐と大の

捷を得たり。曉の及びく師を収め退く時象毒矢の中と斃とす。
土人此を徳としく南山小墓す。今に至るや。春秋小其塚を祭す。
輟むるや。

義牛

義牛ハ宣興の銅棺山の農人吳孝先と云へる者の家小畜す牛あり。力
ありと徳あり。日々小山田を耕する二十畝。飢るる甚しと以て田の苗を
食ふる。孝先寶としく養ふ。孝先が子希年とく年十二の時に
が牛の背小跨り行ゆ。小乗と遊ぶ。牛洞水の傍とあり。草を食
る。忽一つの虎あり。林中より牛の後を伺く。希年を攫ん
と。牛此を知り身を旋し轉して虎の方小向ひ徐小行ゆ。草を啣む。希

年慎ましく牛の背伏と動き。虎牛の歩と来。虎見と踞。牛を俟つ。
 牛虎のそを近くありと。遽に犇と力を出しと。虎に觸る。虎の背
 ちる。小兒の目をけり。とく避る。ふひやれく。牛の角のつれ倒さ。と其俵
 狭さ洞の中。のけらる。落と身うごきもえ。為さる。水に堰る。やふかさ
 増す。虎の頭を浸と斃けり。希年牛を驅し。歸と斯と父の告げと
 ば衆人を集め。虎の死し。所處に至と。昇持来と。此を言たり。とぞ。茲
 小孝先が鄰家の王佛生と云者あり。孝先と水の論をありと。争ふ佛生
 家富と。怒あり。行をあり。と。村中の者常の悪居り。と。此の
 争佛生が無理あり。由をへ。毎の云と。孝先をひく。佛生ま。と。怒と。其
 子を率来と。孝先を毆死せり。希年此事を官に訴入。佛生邑令。代

小厚く賂を贈り。と。及と杖を希年。如へ。遂に希年を杖下の斃
 しぬ。希年外の兄弟あり。此冤を白と者あり。孝先が妻周氏。日と。果
 し。希年と止。や。ある。日牛の前。至り。泣く。牛の習と。曰。暴の幸。女
 が力を以と。吾兒虎口を免とせり。今父子俱に。讐人の死。と。皇天
 后土。誰ありと。吾の恨を雪。んと云と。伏沈と泣く。牛此言を。と。大
 め怒り。并ひ鳴きと。飛出と。ら。佛生が家。至る。佛生父子。三人客。向
 ひく。酒飲居。る。お。想。よ。牛登。来と。先佛生を。斃。復。二子。杖
 舐と。斃。客棒。持と。牛と。闘。入者。皆傷。を蒙。と。鄰里。の者。異
 と。と。邑令。白。と。令。此。を。使。と。怖。の。た。と。其。や。息。と。え。と。死。の。り。
 抑人の子の不肖。ある。父の仇。あり。ても。報。え。る。者。あり。と。此。牛。吳。氏。の。父。

子の仇を報ぬ牛ゆとよく義を知ると今が之を聞くと怖死せぬも理ぞか。

義馬

義馬へ吉水地の王禎が乗る所の戦馬あり。明の成化二年丙戌王禎愛列の国通判ある時重役の荆襄名の賊等劫して境ぬち入りし王禎向て之を征せんとも同知の王某賊を怯と王禎とを合せ。指揮官ある曹能柴成ハ元より王某の與一伴と王禎を欺と大昌名の赴と戦ふをいと云と共ぬ陣しと王禎を深入させと西人の引返して道は返す。王禎泥中の陥り大ぬれと賊を罵る。賊怒と王禎が喉を刺す又左の股を断と殺せり。王禎が馬飛走す。府門ぬ歸りて後が門関と入る。

得む。長嘶と肩を踏む其る哀状を告るが如し。守る者戸を開と此を入と多る血ぬ深と鬃ぬ紅ぬ是なり。大昌の地獲をまると二十餘里あり。突始と王禎が討死せりと知と孩と。然とた賊の圍を退と後二十五日ありと尸を取と棺ぬ収む王禎が子の廣と云者あり。貧ゆと家ぬ歸るるあり。是非あり行李並ぬ馬を售んとす。而王某意ぬ馬を買んと想ふ云と竟ぬ値を遣らざると馬を取る。棺を送と二十五日を過し夜半の比馬哀と鳴る其甚異と王某林飼者ぬ云つと莖莖を増と飼むと止やと。王某林飼者と疑ひと自往と櫪を又見と馬驟ぬ前來と頃ぬ齒つた久しと離と。又首を奮ひと其胸を擣きと地ぬ仆し。翼日王某血数升嘔と死

せる。賊平を以て有司に賞罰のさし給ふ時、兩人の指揮ハ殊せしむ
めけり。

秦氏犬

秦邦ハ明の永樂肆の時ハ入りて家富く幼き子あり。京ハ往んとて
トスるハ不吉ある。妻も留け共聴ざりて舟ハ乗つて往んこと。
家ハ白犬あり。秦邦ヲ裾を啣て留るるをす。秦邦悟らば此犬を
挈て偕ハ舟ハ乗て行る。張家灣と云所ハ舟を泊る。盜賊王甲
王乙と云者刀を拔て舟ハ入秦邦を刺殺し。犬後船を躍りて賊を
噛んとす。賊刀を奪て逐る。水ハ飛入て道とる。二賊賊を奪
尸を水畔ハ埋て去ぬ。犬二賊の後ハ付きて往りて賊の家をえり。又歸り來て

秦邦ハ尸の處ハ至りて之を守り。晝ハ食を乞ひ夜ハ其側ハ伏す。斯
く月を経ぬハあはれ奇也と云る。其比廻河御史呂希望と云人此
尸を檢分しあり。犬希呼て前ハ向て跪く。其さま訴る。其
ハ似し。呂御史異ちて之を以て曰。此冤を辨るるん。吏を犬の傍
ハ遣り。犬尸を埋て所ハ往りて足めり。土を爬り。寄りて視る。人ハ尸
あり。呂が云。此ハ犬の故主なり。害せしむ。と云。犬ハ向
て害せる者を知りてやと問ふ。犬尾を搖りて先づ往り。吏ハ犬ハ付て行
る。一里を去りてあり。家あり。二賊人を集めて酒飲り居り。犬先入り甲
ガ衣を噛み次ハ乙ガ履を噛めり。吏來り縛りて御史の前ハ引來り。拷
問し責めけり。服せしむ。時ハ人あり入り跪き泣く。曰。其尸ハ我主也



曹能裝成
欺をす
王禎賊軍の
中
忠死す



かき。我も主と共ぬ手を負いしが。水は落入と不念。幾は泳ぎつれと命
こぼり。二人の賊遂にありと云ふを云と罪は伏しぬ。此僕を
その尸を載せと帰るぬ。犬又之に随と往る。昼夜柩の旁を離
む時と声を拳と悲啼をえる者涙を随さる。帰つたて葬
ある時犬柩に随と墓所に至す。葬を畢る。我見と大に辨びく。傍
ある木に觸と倒と死ぬ。人哀とく。秦邦が塚の傍に埋りしむ。

義犬

丙申の秣の比太原地。名客南方の賈。還るとく。橐の金五六百
むり入し。我持と。中年縣村の境を過とく。道の邊に憩と居る
ぬ。傍に若き男の犬を棒に縛り。荷きこる。同とす。ふ憩と居ぬ。此犬

客の方をうとく哀げちる声を出し。うめ。其さや救とよと云が如し。
客忍びず。と錢を出し。犬を買と放ち。と遣る。少年客の懷中
の重き小眼をつり。潜小跡に付き。往と人無處を合と。一棒に彼客を搏
殺し。小橋の下の流に尸を曳往と。蓋を上。掩ひ懷中なる橐を取
背に負と。往る。犬へ客の殺さし。我見と少年の跡に付き。往と
其家を怒と。帰来と。直に縣中の衙門に走り。往と。をり。縣令
座に升と。獄を聽玉。時なり。犬地上に伏し。啼ふ。天さる。が如訴る。が
如し。吏は。我驅へ。と。縣令曰。汝何の冤。有る。吾吏を遣と。汝は
隨へ。めん。と。吏に命と。犬に隨へ。む。小犬。吏を道と。走。客の死
せる。所。至。と。水。向と。吠。り。吏。草。を。扱。と。尸。を。又。歸。と。其。由。を

報下想ふ賊を捕へんゆがや無しと申す犬使不随来やと歸る
 前の如し。縣令曰汝能賊を知らる我使を遣と汝不隨せん犬又公と
 縣令使の仰せと教人を遣と大に従へむ。凡行る二十里ありふ
 村あり。あやしの人家あり所至至と一少年をえと犬跳て其臂
 を噛と血を出と。吏をく之を縛と縣令至と拷問しけし不遂罪ふ
 伏しぬ其金を問ふ尚在すと自状と。吏を少年が家不遣へ之を
 一めえと素中ふ小き籍あり。居所姓名を記と。縣令の少年を
 獄下し素中の金の籍と。官庫納め然る大又縣令の前至り
 吠とかき。縣令曰客死し且共其家尚あり。此素金他家不與ふ
 一とあやと云と又吏を太原不遣と玉大も亦後かつと往を既

不至ふ其家始と主人の死せる事を聞と驚き又素金恙あら由を
 知と大不感と且泣と。客一子ありととら旅装とと吏と伴と承ける
 大賊の獄中死しと。縣令素金をと其子不與へ玉ひぬ其子梶を囚
 不送と返と大又後ひ往と。凡數千里の旅の途を或宿と或憩入る
 人と聊も違ざりやと。

毘陵猴

萬歷年中毘陵地。名ふ之兒あり。日々一猴を繫ぎと街坊不至と技を
 ちとめ錢を索む數年を積と五六金を蓄ふ不圖同伴の二丐と酒
 飲けるが醉と之を誇と云と。丐聞と惡心を發と毒を酒入と強て
 飲せると竟ふ死とぬ其藏めると金を取と尸を野外の瘞めると。人知

のありきなり。多々猴のそ彼れ従へむ依り日ふ鞭うちをれを猴物て
之れ隨ふ。一日猴何く之往を見えむ。此時縣尹代官張延傑と云人初て
司仕して堂ふ升り玉つる小ツの猴来り丹擗の下跪き、蹄が張延
傑と異ありと一隸命とて猴の往方に従へし。猴前ふ立と養俗
院施行所ふ至りて巧を覓て居らむ。復隸を扯く行途中糶餅を乞
く隸ふ與へく。懸心とるさしむさく行と大市橋ふ至りて巧ふ逢へ
猴両ふ小搜りめ巧が肩ふ跳り上り頬を打ち面を抗そくち名を隸執へ
く縣ふ至りて張延傑鞠問し玉ふる再三ありて巧始り辜伏しぬ
隸とて巧を伴せ銀を取らめたる小包裏あるが在る。杖野外言
浮土の所を堀と戸出る處を棺ふ入り火く焚く時。棺の熾る時猴

隸不向く頭を地入りて禮し跳り火中入り焚け死しぬ隸其由を縣
小申す。張延傑驚き異し且感し玉の。義猴記と云文を作りて
石の判りて末世の遺るにあり。

義鶴

審山の周氏鶴二ツを畜す。頃治乙酉の年周氏門を盗りて死す。國の乱れよ
兵鶴を奪ひて溪上地名の陳氏名の鬻る。然るに其雄主の別を哀しむ
鳴り食せむと死す。雌他の雄と偶せむ。一日野ふ翔り審山の浮圖塔の
つえを羽うち飛り百里を去る。審山ふ至りて。浮圖のありし
徘徊する。三日あり。周氏の僕某之を聞り往り觀る。鶴僕を望み踊り
懐ふ入りて。僕携りて家へ歸り。飼ふ所ふ負りけむ。魚又粟を與ふ

